

令和 5 年 5 月 28 日現在

機関番号：32686

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00459

研究課題名（和文）アメリカ詩「沈滞」期の詩人たち アメリカン・ルネサンスとモダニズムの間隙再構築

研究課題名（英文）The "stagnant" period of American poetry: a rebuilding of the gap between American renaissance and modernism

研究代表者

澤入 要仁（Sawairi, Yoji）

立教大学・文学部・教授

研究者番号：20261539

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、アメリカ詩の「沈滞」期といわれる19世紀後期から20世紀初頭におけるアメリカ詩の水面下を探った。ロマン主義とモダニズムの間隙に光を当てるためである。本研究の結果、MelvilleもTuckermanも伝統に従った素振りを示しながら、ひそかに攪乱しようとしていた。Craneも色彩ゆたかなイメージが鮮烈な自由詩を書き、イマジズムの先駆となっていた。他方、MoodyやCrosbyのような米西戦争期の反帝国主義詩人たちには革新を見いだしたがたかったが、詩人が社会的使命感を抱き、社会が詩人に預言者の価値を見いだしていた。「沈滞」期にも詩と詩人は、前時代と変わらない役割を果たしていたのである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

20世紀モダニズム詩の推進者Poundが「一新せよ」という言葉に象徴される詩革新運動を率い、大きなうねりを導いたことはよく知られる。しかし、Pound直前の詩人たちも、それぞれ「一新せよ」を実践していた。それはPoundのごとく追隨者を巻き込んだ運動ではなかった。孤軍奮闘にすぎなかった。そのため文学史でも異端者扱いだった。けれども、アメリカ詩の「沈滞」期といわれる19世紀後期から20世紀初頭は、「詩人たちの黄昏（衰退期）」でもなく、「詩のスランプ」時代でもなく、孤立無援の試行錯誤の時代だったといえる。同時にそれは、Poundのような行動力や統率力を待たなければならなかった時代だったともいえる。

研究成果の概要（英文）：This study explored the undercurrents of American poetry in the late 19th and early 20th centuries, a period known as the "stagnant" period of American poetry. The purpose was to shed light on the gap, or the so-called void, between Romanticism and Modernism. This study revealed that both Melville and Tuckerman, while pretending to follow tradition, were secretly trying to disturb it; Crane, too, was a pioneer of imagism, writing free verse with vivid, colorful images. On the other hand, the anti-imperialist poets of the Spanish-American War, such as Moody and Crosby, were difficult to be called innovate, but they had a strong sense of social mission and society found prophetic value in their words. Poetry and poets played the same role in the period of "stagnation" as they had in the previous "prosperous" era.

研究分野：アメリカ詩

キーワード：アメリカ詩 アメリカン・ルネサンス モダニズム 米西戦争 アメリカ文学史

1. 研究開始当初の背景

アメリカ詩史を繙くと、紙幅が短く密度が低い時代が2箇所あることが分かる。ひとつは18世紀だ。この時代には「独立革命の詩人」と呼ばれる Freneau や、叙事詩『カナンの征服』(1785)を著した Dwight、同じく叙事詩『コロブスの夢想』(1787)を書いた Barlow らがいた。彼らの活躍は19世紀初頭にもかぶるものの、この詩人たちの扱いがきわめて小さい。もうひとつは19世紀の後半以降、20世紀の初頭へ至る半世紀弱である。それは、19世紀中期のアメリカ詩の隆盛と、20世紀初頭のモダニズム詩の興隆とに挟まれた、いわば間隙の時代だ。調べてみると、当時の文壇も「詩人たちの黄昏(衰退期)」や「詩のスランプ」を認識していた。

けれども、この時代は本当に詩が「スランプ」を迎えた「衰退期」だったのだろうか。ここで南北戦争について、文学を作り出した戦争ではなかった、といわれてきたことが思い返される。Wilson や Aaron によれば、南北戦争は優れた文学を生まなかったという。じっさい南北戦争は、Whitman や Melville の詩作のような例外を除いて、文学史上に残る作品をほとんど産出していないようにみえる。けれども近年、南北戦争がロマンスやパロディなど多くの大衆文学を生みだしていたことが明らかになってきた。同様に視線を変えてみれば、この「間隙」にも、たえまない詩の奔流が見えてくるのではないか。ロマン主義とモダニズムをつなく、うねりを伴った水流が音をたてている様子が見えてくるのではないか。

2. 研究の目的

本研究の目的は、アメリカ詩の「沈滞」期といわれる19世紀後期から20世紀初頭におけるアメリカ詩の水面下を探り、その底流を再検討することであった。

(1) まず小説との対比を行うことが目的のひとつだった。世紀転換期は自然主義小説の時代だが、この作家たちはしばしば詩も書いていた。彼らの詩作を探ることによって、その実験性がモダニズムをみちびく端緒にもなったのではないかと想像した。その仮説を検証しようとした。

(2) 文学史で取りあげられてこなかった大衆詩の一部として、1898年の米西戦争をめぐる詩を取りあげることも目的のひとつだった。約30年前の南北戦争(1861-1865)が多くの詩や歌を生んだように、米西戦争も多くの詩を生んでいた。それらを検討することによって、この時代が詩の空白期ではなかったこと、さらには新しい詩の動きを示せるのではないかと考えた。

(3) 同じく文学史で取りあげられてこなかった大衆詩の一部として、労働運動の詩に光を当てることも目的のひとつだった。かつて科研費の補助を得て19世紀前半のプロテスト詩を研究したとき、労働運動が多くの詩を生みだしていたことを目の当たりにしていた。そこには詩がもつ団結力や公共性が如実に表れていた。同様に19世紀後期から20世紀初頭にかけての労働運動でも多くの力づよい詩が作られたと考えた。それらの詩がモダニズムの出現とどのようにつながるのか探ろうとした。

(4) さらに、英国の詩人たちから受けた刺激を考察することも目的のひとつだった。19世紀の後半、アメリカのとくに女性たちはしばしば文学サークルやサロンを形成して、文学とくに詩を共有しようとしていた。そのとき使われたのが Elizabeth Browning などの英国詩人の作品だったからである。それらの刺戟がロマン主義からモダニズムへの変化に影響を与えたのか検証したかった。

3. 研究の方法

本研究は以下のような方法で行われた。

(1) まず、上述の目的に則して、この時代に作られた詩を基礎資料として収集した。詩集やアンソロジーから始めて、最終的には新聞雑誌やアーカイブを探索した。

(2) 第2に、どのような具体的事件や社会問題が、直接的あるいは間接的にそれらの作品成立の背景になっているのか調査し、当時の報道や後代の研究と比較対照して検討した。たとえば米西戦争に関わる詩作であれば、史実とその報道を閲して、どのような事件が描かれているのか確認した上で、それらを歌った詩作を再検証した。

(3) 第3として、同時代の小説家の手法と対比することにより、小説を中心とした当時の文学運動との類似点や相違点を明らかにした。彼らが小説に革新を試みたように、詩をロマン主義から引き離し、リアリズム等の新しいフェイズへ引きつけようとしていたのかどうか探った。

(4) 最後に、詩の受容形態を確認し、それがどのような影響を与えたのか考察した。たとえば前時代には詩人は預言者であるような扱いを受けたことがあった。あるいは詩人自身も国民を代表する意識をもつことがあった。詩人自身もみずからの公共性を意識していたのである。19世紀後半ではどうなのか。詩人は詩をどのように考え、読者たちは詩人に何を期待していたのか、

を探った。

以上の方法で研究を遂行するため、4年間に計4回の海外出張を行い、アメリカの図書館で資料を調査した。コロナ禍のなか、当初の予定より、その回数をはるかに少なくなってしまった。

4. 研究成果

本研究の成果は大きく3種類に分けられる。

(1) まずは小説家によるアメリカ詩への貢献である。彼らは小説に工夫を凝らしたよう、詩作にも個性豊かな工夫を凝らしていた。

たとえば Herman Melville である。Melville は詩史の流れから逸脱しているだけでなく、それを攪乱しようとさえしていたことが分かった。それゆえ、ロマン主義とモダニズムの間隙を埋める詩人といえることが分かった。じっさい『戦争詩集』の序文や『ジョン・マー』所収の詩「イオリアン・ハーブ」には、ロマン主義の代表的トポスであるイオリアン・ハーブが使われていた。しかし、そこに歌われているものはロマン主義的な想像や空想ではなく、「現実の再現」であった。これはロマン主義の系譜に連なるそぶりをしながら、じつは詩史を超越しようとした態度といえる。

韻律にもメルヴィルの新しさが表れていた。勉強家のメルヴィルはミルトンやシェイクスピアの詩を研究していたが、それらの韻律を模すのではなく、定型から逸脱した新奇な韻律を試みていた。それはホイットマンのような自由詩ではないし、多くの場合、南北戦争という未曾有の状況を描くために類のない韻律が必要だったという背景もあるのだろう。しかし、たとえば詩「シャイロー」では行末欠損の行と行首余剰の行を並べることによって、2行が長い1行のごとく連なる効果を作り出していた。詩「カンバーランド号」では最終的に弱強格の部分が強弱格のリフレイン部へ収束してゆく仕掛けが施されていた。このような斬新な試みはロマン主義の詩人にはほとんどみられない。

自然主義小説家 Stephen Crane の詩作も本研究にとって重要な作品であることが分かった。それはあざやかな色彩を使ってイマジストのような鮮烈なイメージをちりばめながら、自由詩という形式で書かれた作品がほとんどだった。その第一詩集『黒い騎手たち』(1895)は、フルタイトルが『黒い騎手たちおよびその他の行』だった。つまり、詩人は自分の「その他」の作品を「詩」と呼ばず、「行」lines と呼んでいたのである。それは彼の詩作は鋭いイメージの連続だったから、poems より lines という呼び方がふさわしいと考えたからと思われる。このことは詩の伝統への抵抗といっている。Whitman がみずからの作品を poem ではなく song と呼んでいたことも思い起こさせる。また、Crane の第2詩集『戦争はやさし』(1899)の巻頭におかれた表題作は、自由詩とはいえ、[ai]の音を散りばめるといふ入念な工夫がほどこされていた。これものちにパウンドらが従来の韻律ではない新しいリズムを求めたことに相当するといえる。

(2) 文学史では取りあげられることが少ない本来の詩人たちの作品にもひそかな転覆的態度がみられた。その代表が Frederick Goddard Tuckerman である。たしかに Tuckerman はソネットという伝統的詩型をしばしば使っていて、伝統にならった詩人のようにみえる。けれどもそのソネットは、ペトルルカ風でもシェイクスピア風でもなく、それらの定型的進行への期待を誘いながら、やがてその期待を裏切るような逸脱を含んでいた。それだけではない。視覚や色の使い方も印象的だった。たとえば詩『問題』では、恋人をどのように飾り立てどのような場面において描くべきかという「問題」を歌っていた。語り手は詩人であり、同時に画家だ。したがって赤や青の色だけでなく、真珠や大理石の輝きも使う。古今の伝説に空想を馳せることによって重層的に女性の美を描いたパウとちがひ、もっと感覚的といえる。感情や空想を経由することがなく、絵画のごとく直接、鮮烈に描いているからだ。これは、のちに色彩を多用した上述の自然主義作家 Crane の手法を想起させる。

(3) 米西戦争前後のアメリカ詩は、詩の新しさではなく、社会における詩や詩人の役割や意義を、あらためて如実に体現していることが分かった。米西戦争というと、しばしば Mark Twain が論じられる。たしかにそのエッセイ“To the Person Sitting in Darkness”ではアメリカの介入を批判していた。

けれども本研究では Twain に劣らず勇猛な声をあげていた詩人を見いだすことができた。たとえば William Vaughn Moody だ。その詩“An Ode in Time of Hesitation”では、南北戦争で黒人部隊を率いた Robert Gould Shaw の記念碑を前にして、南北戦争と米西戦争を対比させることによって「自己軽蔑」の「怒りと痛み」を歌っていた。それはストレートな痛罵ではないぶん荘重な声になっていた。また詩“On a Soldier Fallen in the Philippines”では、フィリピンで斃れた米兵の名譽を求め、そうすることによって帝国主義の非を鳴らした。

Ernest Crosby も見いだすことができた。現在ではまったく言及されない詩人だが、生前、Twain と並ぶ反帝国主義文学者とされていた。その詩は荒々しさが特徴だ。たとえば詩“The New Freedom”では、ホイットマン詩のごとく長い行からなる自由詩型を使って、独立革命期の圧制者とはちがう新しい圧制者を「汝の魂の中に探せ」と求めていた。詩“The Real ‘White Man’s Burden’”では、米国によるフィリピン「文明化」を正当化した、英国 Rudyard Kipling の詩“White Man’s Burden”をもじることによって帝国主義者たちを面罵していた。そこでは「息子たちを外地へ送り、(現地民)の求めに応えさせよ」と歌った Kipling に対し、外地へ送る若者に「聖書と砲弾と

ジン」を持たせよと痛烈に歌っていた。

これらの詩にモダニズムの兆しといえるような革新的な創作意識を見いだすことは難しい。Crosby の自由詩型も強い思いのあまり自由詩になってしまったようにも見える。けれども詩人たちが詩作によって時代を変えようとしていたこと、そして読者たちが詩人たちの言葉を傾聴し、それに心が動かされたから広く読まれたと思われること、は明らかだった。詩の「沈滞」期といわれてきたが、それ以前の時代と同様、詩と詩人は社会的な役割を果たしていたのである。そのような社会の期待に応えようとする詩人の意識が新しい詩の運動を引き起こす原動力のひとつになったと思われる。

以上のように、アメリカ詩の「沈滞」期といわれる 19 世紀後期から 20 世紀初頭にかけての時代には、アメリカ詩の奔流が音をたてていたことが分かった。それはけっして流れが枯れた時代でもなかったし、流れが停滞した時代でもなかった。

Ezra Pound がみずからのエッセイ集を *Make It New* と題したのは 1934 年だった。それは 20 世紀初頭のモダニストたちの運動を極限まで凝縮した言葉だった。けれども本研究では、モダニズム以前に「一新せよ」というスローガンをひそかに掲げていたような広義の詩人たちがいたことが分かった。たしかに彼らには Pound のような影響力がなかった。ひとりで試行錯誤を繰り返さざるをえなかった。けれども前時代に積み上げられてきた圧倒的な文業を前にして、彼らは自己の存在を示すためにあの手この手をつくそうとした。四面楚歌のなか孤軍奮闘を繰り返して一新を試みていたのである。

同時に、この研究は、Pound の行動力や統率力、カリズマ性に対して光を逆照射することにもなったと言えそうだ。「停滞」期の詩人たちはいわば孤立無援だった。四面楚歌の状態だった。彼らの個々の試みが運動という形となってシナジー効果をあげるためには、Pound のような行動力や統率力そしてカリズマ性が必要だった。彼らはそれを欠いていた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 澤入 要仁	4. 巻 80
2. 論文標題 詩人メルヴィルの流儀 『戦争詩集』とその韻律を中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 英米文学	6. 最初と最後の頁 27-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 澤入 要仁
2. 発表標題 詩人メルヴィルの流儀 「そばぬるトロフィー」のつかみ方
3. 学会等名 日本英文学会・第91回大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------